

# スイス・オーストリアの街とその水辺

企画調査部 参事 北原 寛志

## 1. はじめに

近年、我が国は世界の中でも比類の無い経済発展を遂げた。経済が成長すれば、人々を取りまく環境も変容し、種々の物事に対する人々のニーズも変化する。それは河川に代表される水辺についても同様であり、過去に「治水」、「利水」を最優先させた時期とやや様相が異なり、「水環境」に対する関心が高くなってきている。「ゆとり」という言葉を頻繁に用いるようになるとともに、水辺に対しては「潤い」、あるいは「安らぎ」というものを期待している。したがって、現在では、河川や水辺の持つ幅広い機能を再認識した水辺空間整備というものが求められている。

このような状況を踏まえ、国内で現在行われている水辺空間整備を念頭に置きつつ、海外における河川や水辺に対する取り組み方を参考にするという観点から、国としての歴史もあり、なおかつ常に人々の生活と自然との調和を考え、河川に代表される水辺に対しても、環境あるいは生態系に配慮した整備がなされていると考えられるヨーロッパの国々を視察するものとした。なかでも、特に各国の人々が訪れ、そのために水辺だけでなく種々のものに対しても整備に工夫が施されていると考えられるスイス・オーストリアを視察国とした。

日程等については、次頁に示すとおりであるが、ここでは特にスイスではチューリヒ市とローザンヌ市、オーストリアではインスブルック市とザルツブルグ市について報告するものとした。

## 2. チューリヒ市における街とその水辺

チューリヒ市は、スイス国内で最も人口の多い地方自治体であり約35万人を擁し、ドイツ系住民が多く国内での商工業、金融業の中心であるとともに、

文化、芸術の中心でもある。今から2千年以上前のローマ時代には既に町の中心であるリンデンホフに税関が置かれ、都市生活らしきものが誕生していたということである。

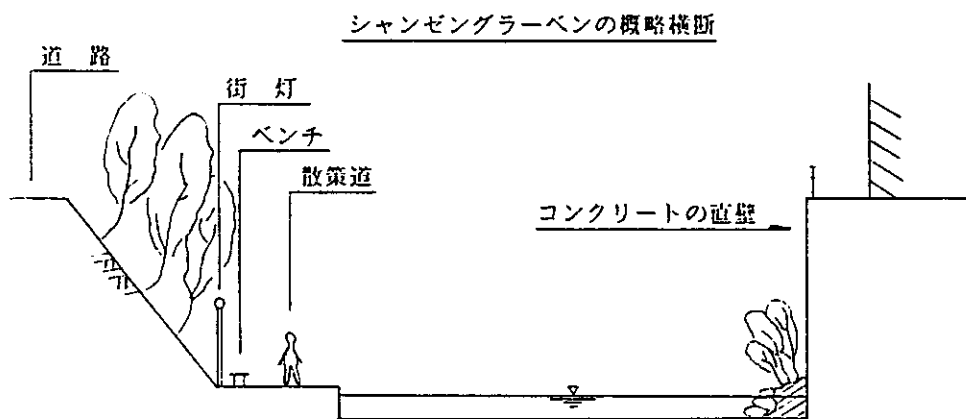
街はチューリヒ湖より流れ出るリマト川とシール湖より流れ出るシール川にまたがっているが、リマト川沿川に市庁舎、あるいは中世の教会・大寺院が集中していることから、特にこの川の沿川を中心として栄えてきた形跡が伺える。また、リマト川の左岸側、中央駅からチューリヒ湖岸までは市内随一の繁華街であるバンホッフ通りが通っているが、この通りでは沿線にポプラ並木を設け、公共輸送機関のみ通行可能とする歩行者優先の配慮が見られた。また、随所にポケットパークが設けられていて、その中の施設についてもストーン・ヘンジを模したモニュメントを用いる等工夫が見られた。

#### 調査の日程及び視察地

日次	月日曜	発着地（滞在地名）	時間	交通機関	視察対象
1	7/8 (日)	東京・成田 発	20:30	スイス 航空	
2	7/9 (月)	チューリヒ 着	6:25		リマト川・シャン ゼングラベン
3	7/10 (火)	チューリヒ 発 ルツェルン ～ベルン		鉄道	チューリヒ湖 ロイス川・フィ
4	7/11 (水)	ベルン 発 ジュネーブ 着		鉄道	アバルトシュテッテ 湖、アーレ川
5	7/12 (木)	ジュネーブ 発 ローザンヌ 着		鉄道	ローヌ川
6	7/13 (金)	ローザンヌ 発 モントルー 着		鉄道	レマン湖
7	7/14 (土)	モントルー 発 インターラーケン 着		鉄道	アーレ川
8	7/15 (日)	インターラーケン 発 サンモリッツ 着			サンモリッツ湖
9	7/16 (月)	サンモリッツ 発 インスブルック 着		鉄道	イン川
10	7/17 (火)	インスブルック 発 ザルツブルク 着		鉄道 バス	イン川
11	7/18 (水)	ザルツブルク 発 ウィーン 着		鉄道	ザルツァッハ川
12	7/19 (木)	ウィーン 滞		鉄道	ドナウ運河
13	7/20 (金)	ウィーン 発	11:25	オーストリア 航空	
14	7/21 (土)	東京・成田 着	8:00		

リマト川沿川の右岸側では、水際にベンチ、階段護岸の設置が見られ、左岸側では、石畳で構成された路面上にテーブル、イスを並べ“水辺のカフェ”を演出する等水辺空間の利用が見られ、さらに、チューリヒ湖岸では、遊覧船の船着場と一体化した水辺のテラス、階段護岸、広々とした散策道の整備が見受けられた。

また、このチューリヒ湖より流れ出て、中央駅付近でシール川と合流するシャンゼングラーベンというかつての運河（元来は要塞に沿って作られた掘ということであった）があるが、近年この水路の環境悪化が問題となり、市民の憩える水辺空間とするため10年の歳月をかけ美しい水辺として、再生されていた。左岸側には街灯、ベンチを配した散策道を整備し、右岸側は建物が近接して直壁で構成されているので、植生を配する等、景観・生態系に対する配慮が見られた。さらに、これより上流のチューリヒ湖近くでは、堰を設けることより河道内に水を溜め、周囲を塀で囲い市民の泳ぎの場として、一種の河川プールを提供していた。

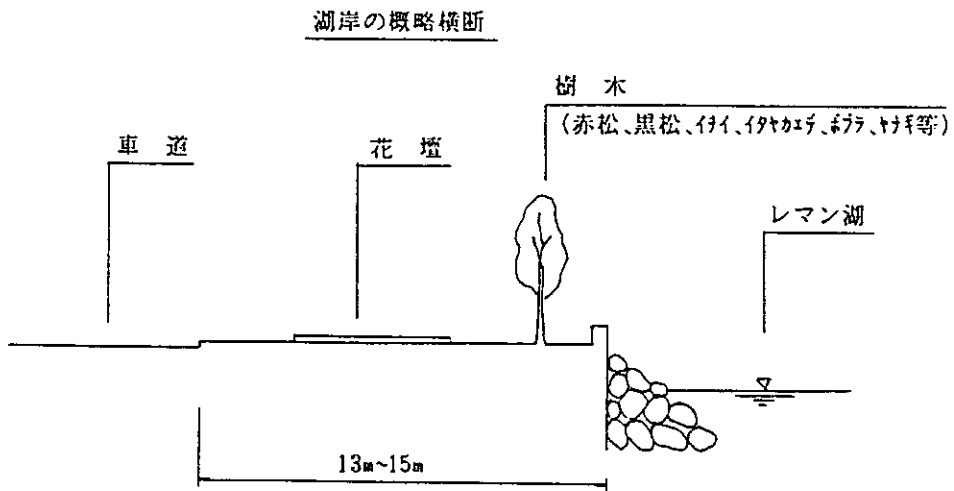


### 3. ローザンヌ市における街とその水辺

ローザンヌ市は、人口約14万人を要するボー州の州部である。市内にはスイス連邦最高裁判所、ローザンヌ大学、ホテル学校、インターナショナルスクール等があり、知的色彩が濃く、国際オリンピック委員会IOCの本部もあり国際的雰囲気を持っている。

ローザンヌ市を含む周辺の地形は、レマン湖に向かって流れ込むような斜面で構成されているが、この地形的要因を反映して製造されたワインは特に上質ということで知られている。即ち、この斜面に展開されたぶどう畑は直接的な日光だけでなく、レマン湖からの反射光をも受けて育つために豊潤さを増すということであった。

この地での水辺空間整備は、レマン湖岸において見られる。延長1km以上にも及ぶレマン湖岸の緩やかな曲線を利用し整備された散策道と、それに併せて配置された花壇である。幅員を充分確保した散策道に設けられたこの花壇では、様々な種類の花樹が植栽されデザインに工夫が見られるのみならず、花壇自体の形状、ライトアップ、あるいはベンチの配列等にも工夫が見られ一種の植物園を形成していて、人々に潤いを与えつつ歩いていて飽きることのない配慮がなされていた。



#### 4. インスブルック市における街とその水辺

インスブルック市は、人口約15万人を擁するチロル州の州都である。約2000年前、現在の北イタリアとドイツとを結ぶ幹線がこの地区を通り、ローマ人が軍営を設けていたのがウェルディデーナと呼ばれる村であったが、現在のインスブルック市の南部にあるビルテン地区がこの村にあたる。インスブルックという言葉は“イン川に架かる橋”という意味を持つが、これは12世紀に当時イン川兩岸の村を結ぶために橋が架けられたことに由来する。その後、1420年にはチロル州の州都となり、特にハプスブルグ家のマクシミリアンⅠ世がここに宮廷を設けたことにより繁栄したということである。

街の中心部はイン川とジル川とに挟まれた地区に位置し、特にイン川右岸側には、旧市街地の歴史的遺産が集積していて、当時の繁栄の形跡を見ることができる。

イン川沿川では、きれいに刈り込まれた低木とともに芝などを取り入れた散策道が整備されていた。また、環境に対する配慮から護岸の根固め部に植生を配したり、あるいはコンクリート護岸の与える印象を少しでも緩和するためにツル性の植物で表面を覆う等の工夫が見受けられた。

#### 5. ザルツブルグ市の街とその水辺

ザルツブルグ市は、人口13万人を擁し、ドイツ国境に近くザルツァッハ川の兩岸に広がるオーストリア主要都市の一つである。ザルツブルグ（塩の城）という名のとおり、古くから岩塩からとれる塩の産地として有名なこの地方は、ドイツとフランスをつなぐ重要な東方交通路として栄えた。ローマ法皇の任命した大司教によって長く支配されていたため、イタリア風の建物や寺院が目立ち、“北のローマ”とも呼ばれている。また、ザルツブルグはモーツァルトの生誕の地でもある。

街はザルツァッハ川沿川を中心にして栄え、左岸側にはこの街のシンボルの存在である「ホーエンザルツブルグ城」があり、その周辺には旧市街地が広がっている。また、右岸側では「ミラベル庭園」等比較的新しい時代の遺産が

点在している。

ザルツェッハ川沿川には散策道の整備が見られたが、護岸工においては、下部が自然石を利用した石積み、あるいは柳枝工で構成され、上部は下部より緩勾配で芝付けされた土羽で構成され親水性に対する配慮が見られた。

## 6. まとめ

今回の視察調査では、スイス・オーストリア国内の街を中心とし、特にその市街地に存在する水辺に焦点を当てたものであった。これらの国々における水辺と日本における河川等の水辺とでは、基本的に自然条件、社会条件に差異があるので、現在なされている整備を一律に比較することは困難であると考えられる。しかしながら限られた範囲内ではあるものの、視察地全体を通してその“街づくり”、あるいは“川づくり”について考えた時、その底流をなす基本コンセプトにおいては一貫した流れがあるように感じられた。そこで、今回の視察において特に気付いた点を整理すると以下のようになる。

### (I) 街づくりの観点

- ① 古い街並と新しい街並が非常に良く調和している。(主として景観面から見た場合)
- ② 石畳が歩車道として現在でも活用されている。(主として機能面から見た場合)

### (II) 川づくりの観点

- ① 徹底的に花樹等の植生を導入し、人々に潤いや安らぎを与えている。(河川の持つ親水機能・自然生態機能の強化)
- ② 水辺の整備においては、できる限り広々とした空間を設けることにより人々の利用に配慮している。(河川の持つ空間機能の強化)

#### (I)-①について

スイス・オーストリアともにハプスブルグ家等の栄華を偲ばせる中世の遺産等が数多く見受けられたが、これらの遺産を旧市街として現在では成り立たせ、新市街地と隣合わせで存在させている。これは、この地域の人々の“保

存”し、なおかつ“共存”していこうとする努力の表れであると考えられる。

また、現代的な建物等が林立している新市街地からこのような旧市街地の街並に入れば、周囲の状況が変化するので、違和感を持つであろうと予想していたが、あまり抵抗も無くその雰囲気比較的自然的に溶け込めるようであった。それは、当時の建物が石材で構成されているものが多く安定感があり、また、現代的な建物と材質の色も類似し、建物自体の造りにおいても現代に通じる洗練されたものがあるためであろうと考えられた。さらに、これらのどっしりとした落ち着いたある建物があるために街全体が重厚感を増していると考えられた。

#### (I)－②について

両国内においてリマト川沿川、あるいはベルン市の目抜き通り等に見られたように路面が石畳で構成されていて、それが今なお機能している光景が頻繁に見受けられたが、この事は市街地に限られた事ではなく、随所に見受けられた。石畳は景観的には落ち着きがあり風情が感じられるものの、機能的には必ずしも良いとは言い難い。それは、実際に歩く際にはそれほど気にはならなかったものの、車の通行に際しては路面の凹凸によって音が発生し、運転者にとってはかなりの振動が伝わるものと推測されるからである。このようなことからマイナス面を背負いながらも“保存”し、なおかつ“共存”していこうとする姿勢が伺えた。

#### (II)－①について

花樹の多用については、水辺だけでなく街についても言えることであり、家屋の窓辺、橋の欄干、街中のポケットパーク等に非常に多く用いられていた。そして、河川についても生態系に対する配慮から植生を配したり、あるいはコンクリート護岸が人々に与える印象を少しでも和らげるために緑で覆ったり、水辺の散策道に樹木、花壇の設置が多く見受けられた。特にローザンヌ市のレマン湖岸では、これらの花樹が様々な種類のもので構成され、そのデザイン、配列等に工夫が施されていて、1 kmもの距離を飽きることなく歩くことができた。さらに、これらは維持・管理の面では非常に手間がかかるものと思われる

ものの、整然と整備されていることから、維持・管理体制についても確立されているものと推察された。

また、花樹だけでこのような楽しい空間を創出することに改めて驚きを感じるとともに、人々に潤いや安らぎを与える原点を見た思いがした。

(Ⅱ)－②について

レマン湖岸、あるいはローヌ川沿川等の状況から水辺に散策道を設ける際には幅員を十分に確保し、また、イン川、ザルツァッハ川に見られるように散策道を2本並列に設ける等の配慮が見られた。これらは人々がこの空間を利用することにおいて、機能的にも視覚的にも“ゆとり”を感じさせることに十分なものであった。

以上が今回の視察において参考になった点であった。



チューリヒ市：バンホッフ通り

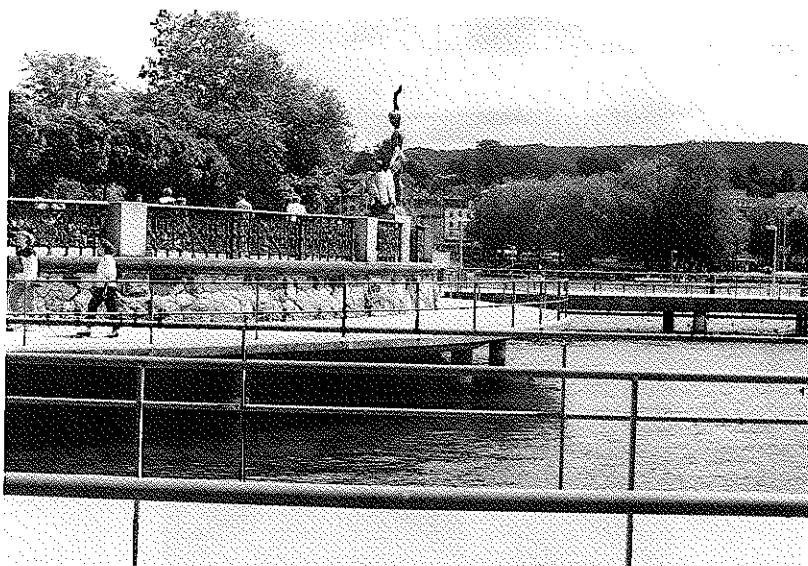


- ・チューリヒ随一の繁華街であるバンホッフ通り  
(公共輸送機関のみ通行可能とし、沿線にポプラの並木を設ける等歩行者優先の配慮が見られる。)



- ・バンホッフ通りのポケットパーク  
(ストーン・ヘンジを模したモニュメントで整備されている。材質は花崗岩で、これはスイス現代デザインの巨匠マックスビルによるものということであったが、市ではこのようなモダンアートの作品を積極的に取り入れている。)

## チューリヒ市：チューリヒ湖岸



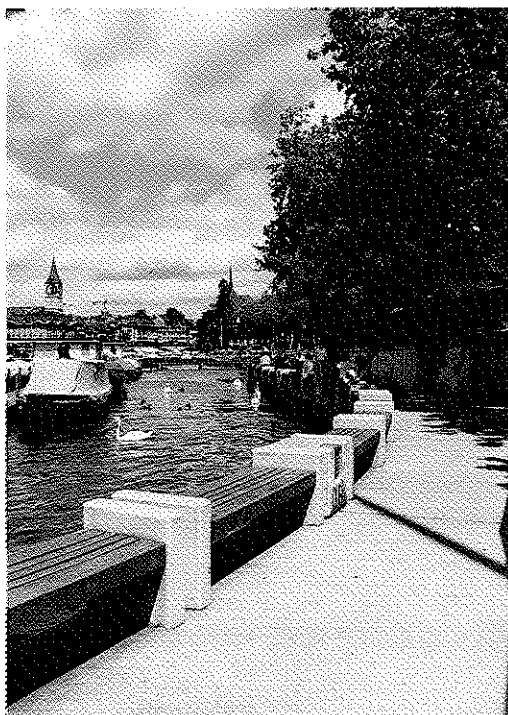
・遊覧船の船着き場と一体化した水辺のテラス



### チューリヒ湖岸のオープンスペース

(この付近はかつて建築群が立ち並んでいたが再開発され、市民の憩いの場として整備されたということである。)

チューリヒ市：リマト川沿川



・リマト川右岸の水際に配置されたベンチ及び階段護岸



・リマト川左岸のカフェ

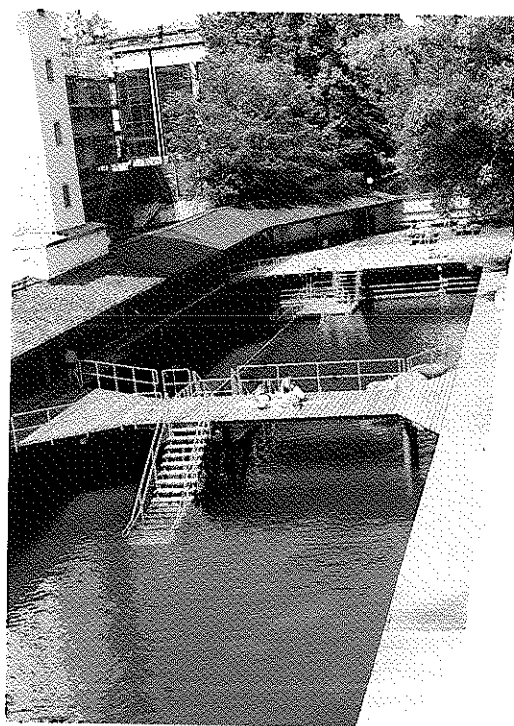
（路面が石畳で構成されていて中世を偲ばせる雰囲気を持ち、建物の支柱が堤体に直結していて一種のコリドーを形成している。）

## チューリヒ市：シャンゼングラーベン



### ・左岸の水辺の散策道

(この水路は元来、要塞に沿って掘られた堀ということであったが、近年環境の悪化が問題となり、10年の歳月をかけ美しい水辺として再生された。)



### ・一種の河川プール

(下流に堰を設置することにより、河道内に水をため周囲を塀で囲い市民に泳ぎの場を提供している。)

ローザンヌ市：レマン湖岸

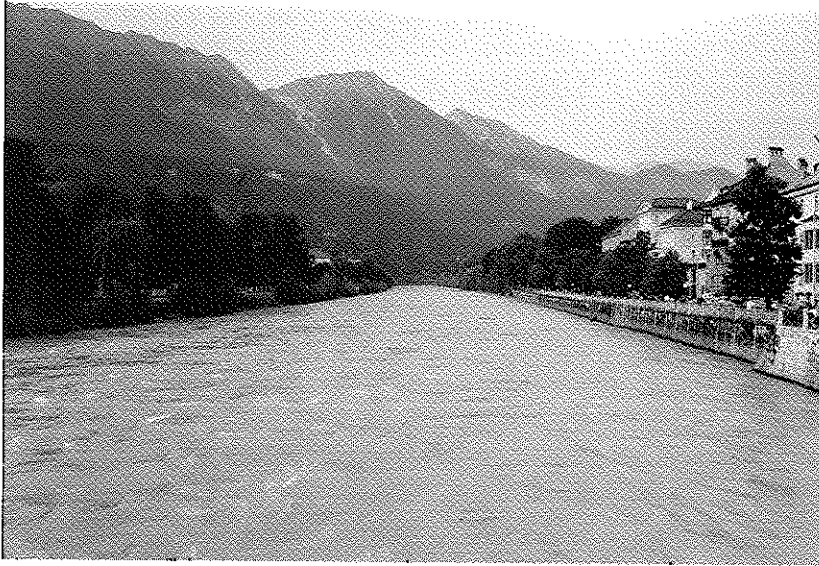


・レマン湖岸に整備された花壇  
(延長1 km以上にも及び散策道とともに  
整備された花壇と並木。)



・レマン湖岸に整備された花壇  
(様々な種類の花樹が植栽され、ライトアップ、  
デザインにも工夫が見られる。)

インスブルック市：イン川沿川



・アルテ・イン橋より下流方向  
(左岸の護岸根固めの部分に植生を配している。)



・イン川左岸の護岸  
(ほぼ等間隔状に緑で覆うことによりコンクリートの  
与える印象を和らげている。)



インスブルック市：イン川沿川

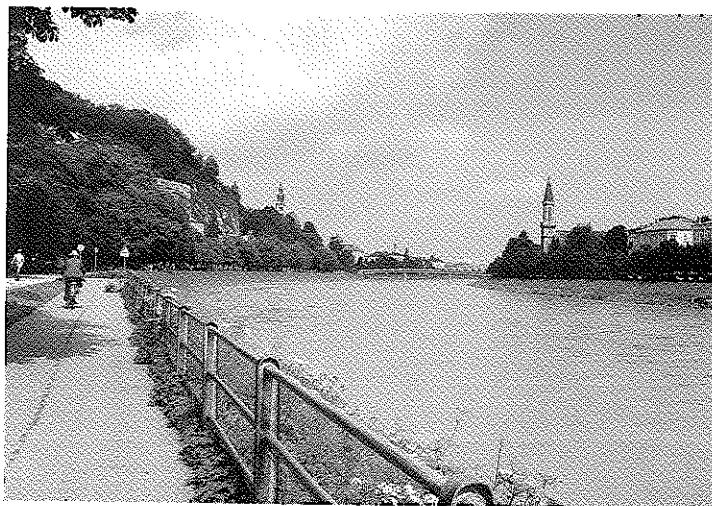


・イン川左岸に2本並列して設けられた散策道



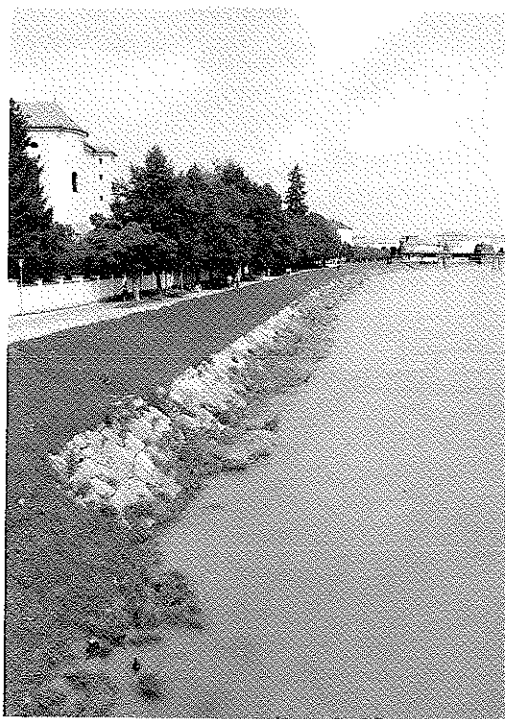
・イン川右岸に設置されたベンチ  
(チェスができるように配慮されている。)

## ザルツブルグ市：ザルツァッハ川沿川



### ・ザルツァッハ川左岸の散策道

(周囲に広がる緑、歴史のある建物、護岸の緑とザルツァッハ川のゆったりとした流れが見事に調和し、時間を忘れさせるような光景である。)



### ・ザルツァッハ川左岸

(護岸の下部が石積み、上部が張芝で構成され、上部は下部より緩傾斜にする等の配慮が見られる。)